

木造阿弥陀如来坐像

常行堂の御本尊は無量光仏の阿弥陀如来像である。阿弥陀如来は古典的な瞑想姿で描かれており、目は半分お閉じになり、両手は阿弥陀定印（ムドラー）を結び瞑想されている。仏教では、仏陀と菩薩は、多くの場合、「32の相」のいくつかの特徴をもって描写されている。これらは、慈悲、知恵、および悟りを意味している。これらには、細長い耳たぶ、頭蓋の隆起である肉髻、およびカールした髪の螺髪などで象徴されている。額には、第三の目として水晶の白毫があり、幻想を通してこの世を閲覧になっている。

この阿弥陀如来像は、彫刻の前にいくつかの檜を一緒に固定し、彫刻をし、その後、漆でコーティングし金箔を推す寄木造で造られている。資料の記録では、これは圓教寺の開祖性空上人（910–1007）の弟子であった彫刻家安鎮によって約1005年に作られたことが確認できる。阿弥陀如来像と常行堂はどちらも国の重要文化財である。

阿弥陀如来は、金色の光輪と頭の後ろから発する光線で表現されている。光輪の重要な役割は、阿弥陀様とその傍らに描かれることが多い慈悲と智慧の菩薩の「種音節」である3つのサンスクリット文字で飾られている。木でできた背景には、阿弥陀様が紫の雲にお乗りになり極楽浄土から来迎されるとき、衆生を救済するために一緒にお下りになる25菩薩の姿が描かれている。